

令和元年（2019年）第1回 熊本市市民公益活動支援基金運営委員会議事録（要旨）

1 開催日時：令和元年（2019年）5月27日（月） 10時00分～10時40分

2 開催場所：ウェルパルクまもと3階会議室

3 市民公益活動支援基金運営委員

- ・出席者： 古賀 倫嗣 委員長（放送大学 熊本学習センター 客員教授）
- 越地 真一郎 副委員長（熊本日日新聞社 NIE専門員）
- 水野 直樹 委員（一般社団法人 スタディライフ熊本 理事）
- 中島 久美子 委員（特定非営利活動法人
熊本県子ども劇場連絡会 理事長）
- 吉永 京子 委員（公募市民）
- 白石 義晴 委員（市民局市民生活部長）
- 藤川 潤子 委員（東区役所東部まちづくりセンター所長）

4 配布資料

資料1 冠寄附者の意向反映

資料2 冠基金の設置について

資料3 令和元年度（2019年度）スケジュール

参考資料① 意見評価シート（案）

参考資料② 事業計画書

参考資料③ 広告事業実施要綱及び掲載基準

当日資料 熊本市市民公益活動支援基金運営委員会 委員名簿

5 会議録（要旨）

【議事事項】

（1）冠寄附者の意向反映

（資料1及び参考資料①、②に基づき、事務局より説明）

（古賀委員長）

ただいまのとおり、助成事業を選考するプロセスのなかに、冠寄附者の意向反映、これまでの言葉を使うなら「寄附者の想い」をどう生かすかということ、審査会の中立性、公平性を十分に担保しつつ進める手順・プロセスを、非常に丁寧に議論のうへご説明いただいた。

これについて、委員の皆様のご意見を承りたいが、ご質問、ご意見はあるか。

（中島委員）

評価シートで、評価しない場合は空白にするということだが、私たちはどのような見方をしていけばいいのかというところに少し不安がある。この部分に対して、少し議論いただけるとありがたい

い。

(古賀委員長)

冠寄附者からの意向として、空白があった事業をどのように受け止めたらいいのだろうかということに対して、事務局からの考えはあるだろうか。

(事務局)

空白をマイナス評価とするものではなく、◎と○があった場合に加点して評価するようなイメージで考えていただければと思っている。参考資料①にあるように、例えば「ST-2」の「子どものための環境体験活動」を例に説明すると、評価欄が空白、今回は「-」となっているものだが、そういった場合でも、寄附者からはコメントを入れていただくことができる。そこからさらに、これはぜひ評価したいというものに対して、「評価する」に○を、「とても評価する」に◎を追加していただくというのが事務局案である。

(古賀委員長)

以前は、福祉分野や国際分野など、分野別による寄附や助成を行っていたが、分野ごとに申請数が偏り、競争率が異なるなどの理由により不公平であるとして、分野に囚われず、すべて一括して評価するよう分野指定制度を廃止した。そういった改善のなかで、寄附者から「福祉分野に寄附したい」との意向があり、そのような想いがある程度くみ上げられるような可能性を残しておこうというものが今回の提案である。先程から説明があったように、採点の際の参考資料という位置づけであり、寄附者にも「参考資料とさせていただきます」とお伝えすることになるので、そのように考えたらいいのではないかと。◎が出てくると特に良いと思いつつも、その辺りがどういう反応があるかわからないが、まさに「寄附者がどういう想いでいるのか」をプラスするものだと考えている。いかがだろうか。

(中島委員)

寄附をしていただいた方の意向をどこまでくみ取れるのかということを含めて、実際に実例が出てみないことにはわからないところもあるが、なかなか公益性の部分でどのように評価していくのかということ、寄附者の想いをどのようにマッチングしていくのかということの困難さが、どうなるだろうかと考えている。

(古賀委員長)

今回の提案では、任意で事業に対するコメントをお願いしている。任意であるため、書く書かないは別として、本当に実施してほしいと思う事業であれば、◎とか○ではなく、血の通った言葉として文章が上がってくるのではないかと考えている。これを私たちが、それぞれどう受け止めていくのかというスタイルでいいのではないだろうか。恐らく、評価方法はこれまでとそう変わらないが、「100万円以上の大口寄附をされた方の希望がどのようなものなのか」ということを受け止めたうえで、本委員会でも、審査に対して責任のある判断をするというプロセスだと認識している。そのような受け止め方でいかがだろうか。

(中島委員)

はい。

(古賀委員長)

他にご意見等はあるだろうか。

(越地副委員長)

そもそも、どうしてこのような提案をするに至ったのかという背景、例えば、先方から何か自分たちの気持ちをもっと伝わるような仕組みを考えてほしいという要望があったのか、もしくは、そういった要望はないが、せっかくこうやって多額のご寄附をいただいたことに対して、事務局側として何か気持ちを汲み取れないかと思ったのか、その辺の説明があればいただきたい。

(事務局)

冠寄附者から「審査に関わりたい」という話もあったが、事務局の方で話し合い、なかなかそこまで関わらせることは難しいということになり、それならどういった関わりをしてもらうのかという検討をすることになった。

また、審査に関わるというはっきりとしたご意見もありながら、何らかのかたちで参画したいというご意見もいただいている。これについては、先程古賀委員長がおっしゃっていたように、以前は「分野指定制度」というものがあったが、審査の採択方法など、いろいろな問題点もあり、現在はすべての事業をジャンルに関係なく、良いものから順に採択していくものに変更しているところなのだが、冠寄附者からの要望のひとつとして「福祉の分野に関心があり、ぜひそれに助成をしてほしいのだが、そういう仕組みはないのか」というご意見があった。そちらについても事務局案に落とし込まれている。

(古賀委員長)

寄附者から何らかのリクエスト、要請があったことが確認できたが、それはそれで大事な抑えどころかと思う。一方で、今後こういった寄附を増やしていくための加速材料になるか。そういう視点もある。今までの、とにかく寄附をして、「どうぞご自由にお使ください」というやり方から、どの程度の関わりを持つかは別として、今回の改正によって、寄附者にとってより自分たちの気持ちが反映される制度になる。これが今後、似たような大口の寄附をいただくときのプラスになるという視点を持っておかなければいけない。それがあれば、非常に今後の展望につながると思うので、そういう視点で今回の改正を受け止めたいと思う。現在冠寄附をいただいた2法人に限らず、今後どんどん新しい寄附者が出てきてほしい。そのための一方策であるという視点というか。なお、審査段階では公表できないが、結果が出た後については、「冠寄附者からこういった意見があった」とある程度公開してよろしいのではないだろうか。

また、これについては昨年度の委員会でも議論があったが、冠寄附者への対応としては、可能であれば広報誌のなかで紹介するだとか、情報提供というかたちでは、すでに現在も対応しているところかと思うが、事業報告会のときに案内を差し上げるということはすでにされていたらどうか。

(事務局)

やっている。

(古賀委員長)

そのように、事業を後押しした以上は寄附者にも出席していただくか、あるいは以前あったように、何かの節目でパネルディスカッションなりを実施するときには、冠寄附者に登壇いただくとか、いろんなことを今後考えていただくことをプラスして、そしてもっともっと波及できるような方向で考えていただくことも含めていくということで、この提案に関してはいかがだろうか。

(白石委員)

寄附者の意向について、例えば福祉に手厚くしたいといったことに対して(1)の案が出ていると思うのだが、(2)の冠基金事業の指名に関して。大口寄附をする方のインセンティブというか、多くの事業に自分の会社名などの冠が付くことで、企業や法人としてのPRにつながる訳だが、付けられるのであれば付けるに越したことはないのかなという気もしながら、冠寄附者側からすると全部の事業に冠が付いても特にそんなにありがたく思わないだとか、むしろ選んだものに付けたいだとか、何かそういった意向もあるのだろうか。

(事務局)

現行としては、すべての事業に冠が付いている。ただ、これは一律に、機械的に付しているものであるため、寄附者の想いがよりわかるように指名をしてもらうというのが、今回の提案である。そのため、寄附者の方が全事業にしたいというご意向であれば、それも可能としている。

(白石委員)

寄附者が全事業に冠を付けてほしいということであれば、それでもいいということで。

(事務局)

もちろん、福祉に絞りたいなどのお話があれば、そういったご意向にも対応する。

(越地副委員長)

全事業に冠を付けるというのは、現行がそうになっているということで、引き続き全事業を希望されるのであれば、従来と同じということか。

(事務局)

寄附者が全部と希望されれば、そのとおり。

(越地副委員長)

全事業を希望したいと言えば、従来とスタイルは変わらない。絞り込んだ場合には、絞り込んだところに冠が付く、選ばれなかったところには付かない、ということでしょうか。

(事務局)

付けないというご意向であれば、そのとおり。

(越地副委員長)

ということは、すべて向こうの意向次第だが、以前よりも冠が付く事業が減ることになるということか。そこら辺の何というのか、メリハリのようなものに対してだが、元々何でも良いですよと言っているなら、今までと同じように全部に冠が付いて、絞り込めば露出が減ることになる。

(事務局)

寄附者によっては、この分野にというような思い入れがあると思うので、自分で選ぶことによる参画というか、そういった想いが強く表れてくるかと思う。また、助成団体にとっても、自分の事業が選ばれたということで、その取り組みへの意欲につながるかと考えている。

(古賀委員長)

実は、これについては事務局ともちょっと相談させていただいたところで、3つぐらいに絞ってはどうかということも話していたのだが、ひとつはこれまでずっと全事業でやっているということ、そして全事業も可であるということは、2つや3つでも良いということなので、できるだけ寄附者の選択肢を拡げておこうということで本日の提案になった。ただ、分野指定制度があったときは、例えば、株式会社えがお様は、医療・福祉分野を指名して寄附をしたことで、寄附者の気持ちがきれいに見えていたということがあったので、同様に希望するものだけストレートに冠を付けることもひとつの可能性としてあるだろう。

そういった意味では、従来どおり全事業も可という、少し緩やかな選択肢を提案した方がよいのではないかというのが、事務局との相談のなかで出てきた結論だった。いかがだろうか。

これまでのやり方を変えることになるため、ここで承認をいただければ、冠寄附者である二法人にはこのように制度が変わったと説明することになる。それについても問題ないだろうか。

(一同、異議なし)

(古賀委員長)

次の2020年度から、言ってみれば試行的に始めて、その中で何か問題点が出てきたらその都度改善していくというような含みを持って、事務局の提案どおり承認してよろしいだろうか。今回選択肢を拡げているので、それをどうするのかということは、次の適用のなかで考えられるのではないかと思う。

(一同、異議なし)

(古賀委員長)

それではこの件については、原案どおり承認とさせていただきます。

(2) 冠基金の設置について

(資料2及び参考資料③に基づき、事務局より説明)

(古賀委員長)

ただいま事務局からご説明があったが、委員の皆様からのご質問やご意見はないだろうか。

特段ご異議がなければ、昨年度と全く同じ名称であるということから、お認めいただいたということではよろしいだろうか。

(一同、異議なし)

(古賀委員長)

それでは、議事の「(2) 冠基金の設定について」を原案どおり承認とさせていただきます。

【4 次回委員会の開催について】

(資料3に基づいて、事務局より説明)

(事務局)

本会議の名称について、今回から「第1回基金運営委員会」としている。これまでは、平成24年度から会議を重ね、前回で言うと「第29回基金運営委員会」としていた。今回からこれを、いつの年度の第何回の委員会であるかわかるように、年4回の開催を予定しているため、年度ごとに第1回から第4回といった名称に変更することにした。

(古賀委員長)

審議事項ではないが、次回委員会の開催に対する説明を含めて、ご意見やご質問があれば伺いたい。いかがだろうか。

基本的には例年どおりのスケジュールではあるが、申請者の便宜を図るために、事前周知開始を少し早めたということが趣旨である。また、私も長い間委員会に関わってきて、どうして第28回といった通し番号にしていたのか、少し不思議に思っていたが、今回から各年度で第1回、第2回、第3回、第4回と節目がわかるようなかたちで開催されるように事務局の方で改善されたところであり、他の委員会も大体そうなっているかと思う。そのように改正、改善したことについては、理由も含めてきちんと議事録に残しておいて欲しい。

いかがだろうか。他に委員の皆様方から、なにかご意見やこの際伝えたいことなどないだろうか。

(越地副委員長)

今回の冠基金に関しての審議は、今後を考える上でひとつの転機になると思う。それは、まず今回は先方の意向を受け止めるかたちで検討されたこと。つまり、寄附する側には、ただ寄附をするだけではなく、その思いが市民の皆さんにより伝わるようなことをお願いしたいという気持ちがあるだろう。それに対する一方策として、今回の決定があった。

ただ、寄附者の意向を反映させていくという意味では、今回のことだけではなく、他にもいろんな方策があるような気がする。そこをどう考えるか。今後も100万円、400万円という多額の寄附をする人にどんどん出てきてほしいわけだが、その場合にこうした「気持ちを表すと市民の皆さんに浸透するんだ」という寄附のしがいのようなものがないと、志の純粹さだけを期待しても現実にはなかなか動かないと思う。

先程委員長からの話にもあったように、例えば報告会のときに顔を見せていただいて、挨拶してもらおうというのはどうだろうか。それから何かイベントをするときには、ぜひ参加いただいて発言してもらおうのもいい。

もっと大きなことを言えば、日本は寄附文化というものが非常に弱いと言われている。そういう寄附文化を考えるような集いやシンポジウムというものを、柔らかいかたちで開催するとしたら、そのパネリストとして出席してもらおうことを考えたい。今回の取り組み以外にも、先方の意向をどうすれば反映できるのかということをお我々はもっと考えなきゃいけないし、事務局にもより検討していただきたい。

何せ寄附というのは、私自身の反省も含めて言えば、非常に苦手意識がある。その盲点を突いたのが、余談ながらいま話題の「ふるさと納税」だと思う。あれもまた寄附ではあるが、方向がずれてきたりしていて、それじゃどうしたらいいんだろうと考え込んでしまう。当基金も寄附なので、何か接点があるような気がしてならない。

(中島委員)

寄附文化というものがなかなか日本に根付いていないということなのだが、これから本当に高齢化社会になって、地域がもっとネットワークを組むということになったとき、自分の持っているお金とかをどう使うのかということも何か考えられるというか、これからの社会を作っていく仕組みを知るような学習会だとか、何かそういったことも必要なかと思う。私の周りにも、亡くなられて寄附したいという方が本当にたくさんいらっしゃって、ただ、なかなかそれをどうしようというところまでは、具体的な情報として皆さんに届いてないなというのがあるので、そういう情報発信の仕方だとか、それがどう生かされるのかというところを、もっと寄附した方にわかりやすく伝えられるような仕組みができていくといいのかなあと感じている。

(古賀委員長)

寄附と募金の違いがよく言われているのが、募金はお金をチャリンと入れたところで終わりだが、寄附は「寄附したお金がどう使われるのか」という責任、責務がある。そのことがよくミッションとして言われるわけだが、そのことを今回の改善のなかで感じる事ができた。とにかく寄附をいただくだけでありがたいという立場であるが、ぜひそこをもう一歩進んで、冠寄附の方にもいろんなかたちで関わっていただき、審査そのものに関わることはちょっと難しいが、ご意見を反映することで思いがかたちになるという、本基金が始まったときのスローガンである「思いをかたちにするための寄附制度」という辺りを、もっともっとPRできればと思う。

以前にも、もうすぐ設立から10周年になるという話をさせていただいたが、例えばそういうときに寄附文化を考えるフォーラムを考えてみるとか、大きなイベントは大変かもしれないが、例年の報告会にプラスして、今日の議論をできるだけ反映できるような取り組みを事務局の方でも十分にご検討をお願いしたいと思う。

【5 閉会】

(古賀委員長)

これをもって、令和元年度(2019年度)第1回市民公益活動支援基金運営委員会を閉会とする。

(終了)